新編

西鄉隆盛

第五卷

林房雄

林　房雄著

新編 西郷隆盛

第五卷

風の巻
雲の巻

創元社

新編 西郷隆盛 第五巻

昭和二十八年五月二十五日 初版印刷
昭和二十八年五月三十日 初版發行

定價 二〇〇圓
地方定價 二〇五圓

著者 林房雄
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四

發行者 小林茂
東京都中央區入舟町二ノ二

印刷者 永井直保
東京都中央區日本橋小舟町二ノ四
（大阪市北區梅上町四五）

發行所 株式會社 創元社
電話 場町(66)二〇六四・四〇八三・一七三四
振替 東京一五六五・大阪五七〇九九

萬一落丁亂丁本がありましたら取替へます

檢印廢止

（永井印刷・鈴木製本）

風の卷

第一章　重富屋敷……二
第二章　朱欒の實……一四
第三章　冬晴……二六
第四章　荒魂……三六
第五章　煙は薄し……四七
第六章　祕策……六〇
第七章　楠公社……七五
第八章　同憂人……八五
第九章　鰹船……九九

雲の卷

第一章　編笠……一一六
第二章　直言……一二三
第三章　寵臣……一三四
第四章　浪士の書……一四〇
第五章　三つ巴……一四七
第六章　密使……一五四
第七章　砂湯……一六六
第八章　死地の兵……一七三
第九章　大阪の宿……一七八
第十章　宇治川の川風……一九〇
第十一章　須磨の月影……二〇四
第十二章　勤皇道樂……二一〇

風の卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

第一章　重富屋敷

鹿兒島城下皷川、重富屋敷の內玄關に、脊の高い、額の廣い、精悍な鼻梁を持つた三十前後の若侍が出頭して、中山尙之介に面會したいと申出た。重富屋敷の主(あるじ)は島津久光であり、中山尙之介はその腹心の御側小姓である。

若侍の眼窩の深い大きな眼が血濁りして凄氣を帶び、火のやうに輝いてゐるのを見て、取次の者がためらつてゐると、

「下加治屋町の大久保市藏といへば解り申す。」

革の鞭で叩きつけるやうな聲であつた。

中山尙之介はすぐに出て來た。三十前後の、やゝ神經質ではあるが、俊敏さうな顏立の若侍であつた。大久保の顏を見ると、輕くうなづき、御案內致せと側役らしい落着いた口調で取次の者に命じた。あらかじめ打合せてあつた訪問にちがひなかつた。

玄關わきの控への間に案內されて、坐りもあへず、大久保は相手にのしかゝるやうな聲と姿勢で、

「御首尾は？」と言つた。

「良いとも悪いとも申上げかねる。」中山尙之介は重役振りの人を食つた威嚴を見せて、相手の興奮を輕く受けとめた。「なんと申しても昨日の今日だ。殿も昨夜は殆どお寢みにならなかつた。今日は朝から來客つゞき。君のことはたしかにお耳に入れておいたが、お返事はいたゞけなかつた。いたゞく暇もなかつた。」

昨日は有村雄助が自盡を命ぜられた。雄助は櫻田門外の一擧を在藩の同志に報告するために馳せかへつたのであるが、途中で藩廳の手に捕へられ、國許に送りつけられたのである。

大久保市藏は雄助の兄有村俊齋と共に水上峠まで出迎へ、井伊大老斬除の次第を詳しく聞きとり、すぐに引きかへして、重役の新納駿河に會ひ、家老首座島津左衞門への取りなしを賴み、その足で有村家にまはつてみると、既に藩廳から意外な嚴命が下つてゐた。永年の宿志を果したことはいさぎよき次第であるが、容易ならぬ藩難を釀したる故を以

て、切腹して君公に謝罪せよ、但し、本人の自發的切腹なるが故に正式の介錯人など立てることなく、どこまでも自殺の形式をとれといふ嚴達であつた。誠忠組の同志たちは大久保を中心に、夜明けの鷄鳴を聞く頃まで額を鳩めて協議して、一同死を決して雄助の助命を願出ることを決議した。

しかし、雄助は微笑して首を振り、自分が歸つて來たのは命を長らへるためではない。弟次左衞門と共に櫻田門外で斬り死するのが本意であつたが、同志の嚴命によつて止むを得ず、諸藩の有志に義擧の成功を報告し、在藩の同志にはかねての約束どほり義應出兵をうながすために歸つて來たのである。もし諸君が直に突出して禁闕を守護し奉るならば、自分も命を長らへ、その同勢に加へてもらひ、新しい死場所を探すつもりであるが、突出延期といふことになれば、自分はその場で切腹する覺悟であつた。自分の死は最初から決つてゐたので、藩命の有無とは關係ない。しかも今、諸君が自分のために藩廳に强訴したならば、自分と同罪に扱はれ、嚴罰に處せらるることは必定である。諸君の突出は延期されたが、中止されたのではなからう、いづれは突出して死地に赴く諸君の志を生かすためにも、自分は喜んで弟次左衞門並びに水戸の同志のあとを追ふ、と言ひ、服を改めて皇居を遙拜し、先祖の墓所の方向に合掌し、母と兄弟たちに別れを告げ、從容迫らぬ態度で腹を切つた。行年二十六。

弓張の月も時雨にくもるべし
思ひはなたばくまなからまし

雄々しくも君につかふるもののふの
母てふものは悲しかりけり

雄助次左衞門兄弟の母蓮子刀自が、義擧に赴き死に赴く我が子に贈つた歌である。

*

大久保市藏は有村雄助の見事な最期を見とゞけて、何事か深く決心した模樣で自宅に引上げた。そして中山尙之介のもとに使ひの者を出し、自分は机によつて白封の書狀をしたゝめ、輕い食事をとつて一睡し、午後の二時頃に眼をさまして、重富屋敷に推參したのである。血走つた眼の色は異常な決心の現れであつた。

「どうあつても今日はお眼通り願はねばならないのだ。もう一度御都合をうかゞつていたゞきたい。賴む。」

「と申しても……江戸の變報が殿のお耳に達したのは、やつと昨日の晝のことだ。君の耳に入るよりも遲かつたかもしれぬ。まだ御對策どころではないと思ふが。」

「だからなほさら早くお眼にかゝらねばならぬのだ。御對策がきまつてしまつた後では何もならぬ。願書もこの通り用意して來た。ぜひともお取次を願ふ。」

懷中した袱紗包みの中から白封の書狀を取出して、中山尙之介の前に突きつけるやうに置き、顎を引き奥齒を嚙んで相手の顏をまつすぐに見つめた。有無を言はせぬ激しい眼の色であつた。

「いや、解りました。それほどに申されるならお取次致さう。」

「我が黨の去就にかゝはることだ。君からもよろしくお取りなし願ひたい。」

「承知致した。」

氣に押されたといふのか、中山尙之介は我になくぺこりと頭を下げ、書狀を懷中にをさめて、大廊下の向うに姿を消した。

大久保市藏はその後姿を睨むやうに見送つて、腰差の煙管に刻み煙草をつめ始めた。その手がかすかにふるへてゐる。崩さぬ膝頭に煙草の粉がはらはらと降りしきる。窓障子の外は南國の晩春の八ッ過ぎ、午後三時の明るすぎる日射してあつた。

*

島津久光は居間の障子を開け放させ、春の花々は散り果てて、早くも若葉の色に燃えはじめた庭木のみづみづしい木芽立ちを眺めてゐた。昨日江戸から到着した報告書によれば、三月三日の櫻田門外は激しい吹雪であつたといふ。だが、その日の鹿兒島は暦に先がけた桃の花盛りであつた。それから二十日すぎた今日は一飛びに夏が來たかといひたいほどに肌も汗ばむ暖かさであつた。

久光の眼も血走つてゐた。不眠の疲れが重く眉根にたまつてゐる。だが、脇息に肱もかけず、黑柿の書机の前に膝を正して端坐してゐる姿には精氣があふれてゐた。當年四十四歳。男の厄年を見事に乘切つた男盛りの精氣である。父の齊興の寵愛深かつた生母お由良の方に似て、下膨れの、眉の丸い、どちらかといへば子供つぽい、いつまでも年をとらぬ型の顏だちであるが、庶子に生れて少年の頃に御家騷動の渦中に卷きこまれ、しかも巧みに渦の外に身を避けて、よく己れを持ち、政情の自然な推移に身をまかせつゝ、つひに薩摩藩政の實權を掴るに至つた聰明と克己と負けじ魂は、その生得の美貌を生かして、經驗と自信にみちた男盛りの彫りの深い顏を作上げてゐた。無知と無能と輕率の標本のやうに言はれる謂ゆる殿樣顏では決してなかつた。

兄齊彬が封をついだとき、久光は三十三歳であつた。それ以來十年間、彼は重富家一萬石の當主として、無位無官の眼立たぬ暮しをつゞけて來た。やゝ誇張していへば、藩

内の煩しい政爭に捲きこまれないために、自ら世を避けて蟄居十年、讀書三昧の隱遁生活の中で學識と德性を養つて來たのである。御抱守役の上原拙庵は昌平黌の岡田寒泉の高弟で闇齋派の學者であつた。書道の師は兒玉頑翁で米芾流の書をよくした。「精獻遺言」は少年の頃からの愛讀書であつたが、同時にまた、蘭癖家と呼ばれた祖父重豪、兄齊彬の風を學んで蘭書の解讀に心を勞することも忘れなかつた。父齊興の下で軍賦役名代をつとめてゐた頃には、古今の兵書軍書にも眼を通した。和歌の道も學び、漢詩も作つた。本居宣長の著書は早くから座右にそなへたが、亂世のきざしとともに次第に勢ひを加へてつひに薩摩の若侍の間にも多數の心醉者を持つやうになつた平田篤胤の著述をも侍臣に命じて集めさせた。今この部屋の書架にも篤胤の「古史傳」の板本が積みかさねてあるが、決してたゞの飾り物ではなかつた。

中山尙之介が次の間に兩手をついて、

「申上げます。御徒目付大久保市藏、御內謁を願つて玄關に參つてをりまする。いかゞ取りはからひませうか。」

大久保といふ名前を聞くと、久光は眉をひそめた。

「大久保市藏なら先日まゐつたばかりではないか。」

「さやうでございます。」

「重ね重ね、あつかましく何事であるか。」

「用向の次第は、これなる書面にしたゝめてあると申してをりまする。」

久光は中山の差出す白封の書狀を受取つたが、開いて見ようとはせず、

「返事は今日でなくともよからう。歸してしまへ。」

「いつかな歸りさうにもございませぬ。何事かよほど決心の模樣で……」

「ふうむ、尙之介、お前も近頃はすつかり大久保の一味だつたな。歸せといつてもお前が歸へすまい。」

久光は苦笑して書狀の封を切つた。

*

「此の節、關東表、大變の儀承知お直に言上仕らずては叶はざる事件有之候間、なにとぞ御眼通り仰せつけ下され候やう願ひ奉り候。押して願ひ奉り候儀、不敬潛踰の罪、恐入り候へども、非常の時節、大事の御場合と存じ奉り候間、重罪を恐れ奉らず、萬願奉り候。」

久光の豫想した通りの文面であつた。櫻田事變の詳報はまだ久光の手許に屆いてゐない。有村雄助を護送して歸つて來た足輕肝入坂口吉兵衞の口達書は讀んだが、これは風聞の寄せ集めのやうなもので、大して要領を得なかつた。だが、大久保の一黨は最初から水戸藩士と深い連携がある。彼等の手許には特別な情報がとゞいてゐるかもしれぬ。一

應聞いておくのは無駄でなからう。

「會つてやらう。呼んで參るがよい。」

中山尙之介は安心したやうな顏つきで引きさがつて行つた。久光は手にした書面をもう一度讀みかへし、それと書架の上の「古史傳」を見較べた。書面の內容が篤胤の著書と關係があつたわけではない。圍碁の相手の稅所吉祥院の弟の稅所篤といふのは平田門人で、近頃「古史傳」を手に入れたと聞いて、宣長の「古事記傳」と讀みくらべてみるつもりで借上げたところ、初卷の表紙裏に部厚な建白書がはさみこんであつた。井伊大老の施政に對して興奮した矯激な文辭を連ねね、先公齊彬の遺策實行のため直接獻言致したきことあり、ぜひ御內謁を賜りたいといふ願書で、署名は大久保市藏と有村俊齋の連名であつた。

久光が大久保の名前を直接に見たのは、これが最初であつた。しかし、この種の願書や建白書は久光にはもう珍しくはなかつた。兄齊彬と父齊興が相ついで逝去し、我が實子の忠義が藩主の位に就いてこの方、久光の藩政に於ける地位はおのづから定まつた。まだ正式には布告されてゐないが、事實上の國父であり獨裁者である。昔のお家騷動の關係から、何かにつけて久光を無視し敵視するやうな態度をとりつゞけて來た齊彬派を以て自任する藩內の諸勢力も、次第に國父の禮を以て對するやうになつて來た。久光もつとめて彼等を藩政の要職に復活させ、自分の側近に採用して、自分こそ齊彬の遺策の繼承者であるといふ身振りを示した。この行き方は成功した。特に昨年の秋、齊彬の公然の敵であり、その進取政策の破壞者と目されてゐた島津豐後一派を退場させ、齊彬派の島津左衞門を家老首座に任じて以來、改革を願ひ功名心に燃ゆる若侍の間に盛んな人氣が出はじめたやうである。若侍たちは尊や豫想とは全然ちがふ公平で進取的で決斷力もある指導者を久光の中に發見し、これこそ齊彬のまことの繼承者であると信じはじめたらしい。藩廳の手を通じない上申書や建白書がさまざまな傳手と經路をたどつて久光の手許に集りはじめた。「古史傳」の間に挾まれた大久保市藏の上申書もその一例にすぎない。

建白書の大部分は、昨年秋の脫藩計畫以來、「誠忠組」といふ名で呼ばれるやうになつた若侍たちの手によつて書かれる。この一派の首領は今は大島に流されてゐる西鄕吉之助だと言はれてゐるが、彼の留守中の總帥格になつてゐるのが、若手ながら大久保市藏であることも、久光はよく知つてゐた。

だが、久光は彼等の建白書や上申書を頑固に無視し默殺する態度をとりつゞけて來た。彼等の意見を全然取るに足らぬと馬鹿にしてかゝつてゐるわけではない。久光には久光の考へがあつたのである。

「誠忠組」は輕輩の集りであるが、藩内に於ても藩外に於ても侮れぬ實力を蓄へてゐることを、久光は十分に見拔いてゐた。末輩は別として首領株の間には年少ながら相當の人材が集つてゐる。齊彬が彼等を養成し、彼等を用ひて中央經營の大策を實行しようとしたことが、今に至つて次第に實を結びはじめてゐるのである。藩内では門閥家や要職者で彼等の意見に動かされる者がだんだん多くなり、諸藩の有志との連絡も彼等を通ぜずには行はれないほどになつてゐる。久光としてもいづれ彼等を用ひなければならぬ時が來ることはよく解つてゐる。だが、なんといつても、まだまだその時機ではない。藩内にはまだ久光の敵が多すぎる。輕格の少年輩の矯激な意見に動かされたと思はれては、一藩の統率者としての自分の將來に絶對に不利である。のみならず、「誠忠組」の一黨は水戸をはじめとする諸藩の激派や浪士連とあまりに深い關係を結びすぎてゐる。この關係をある程度まで絶ち切らせた後でなければ、安心して彼等を用ひることはできない。他藩の有志や浪士の無責任な言動に動かされては、どんな危險に捲きこまれるかもしれないし、また大局を見ない暴發に終つて、却つて大策の遂行を妨げるおそれがある。彼等に動かされてはならぬ。必要な場合に自分の方から適當に彼等を動かせばいゝのだ。齊彬の大策の繼承者は彼等ではない。あらゆる意味に於て、この久光を措いて他にないのである。兄齊彬の生前、最も直接に、且つ最も信頼されて、江戸及び京都經營の相談にあづかつたのは他ならぬ自分であつた。齊彬の信頼最も厚かつたといふ西郷吉之助如きも、自分にくらべれば、一使用人にすぎず、決して根本の機密には與つてゐない。齊彬と自分との間のこの祕密は家老達も知らぬ。まして輕格の少年輩の與り知るところではない。……といふ自信が久光の頑固で不動な態度の原因であつた。

久光は「誠忠組」一黨の内謁を殆ど絶對に許さなかつた。建白書の中の重要と思へるものに、侍臣を通じて遠まはしの返答を與へる程度にすぎなかつた。最近、堀次郎と大久保市藏に許したが、これは江戸の形勢の切迫につれて、一應彼等の意見を聞く必要があつたからで、何も彼等の建白書に動かされたわけではない、と久光は思つてゐる。大久保の場合も、十數度の内謁願を出して、謁見を許されたのは僅かにこれで二度目であつた。

＊

やがて、中山尙之介に導かれて、久光の前に平伏した大久保市藏の兩肩は緊張と興奮のせゐであらう、小刻みにふるへてゐた。許されて擧げた顏は蒼ざめ、頰骨が尖つて、熱でもあるかのやうに薄い汗をかいてゐた。

「近う。」

久光は若い家臣の緊張しきつた顏つきを見て、つとめて寛容な態度を示して、座をすゝめさせ、自分の方から話の絲口を切つてやつた。

「書面の趣きは承知した。櫻田の事件は、お前の言ふとほり、まことに容易ならぬ一大事である。それに就て何か意見があるといふのだな。聞かう。腹藏なく申すがよい。」

大久保市藏は燃えるやうな眼で久光の顏を見つめ、やがて眼を伏せて、考へをまとめる樣子であつたが、きつとなつて頭を振り起すと、一氣に言ひ切つた。

「恐れながら申上げます。私共は昨年の秋、江戸表に事變が起つたならば、直に出兵するといふ有難き御內諭を拜してをります。事變は勃發致しました。水戸の有志は、かねてお耳に入れておきました通りに斬姦を實行いたしました。見事、大老の首級を頂戴に及んだのであります。にも拘らず、その日より既に二旬を經た今日、未だに御進發の模樣はございませぬ。と申すよりも、御進發の用意は全くなされてゐなかつたやうに拜察されます。いかなる御趣旨でございませうか。」

最初から明かな詰問の口調である。久光の眉はぴりゝと動いた。

「なんと申すか。」

「お氣に障りましたなら、お許しを願ひ上げます。卑賤の身を以て、かゝることをお伺ひ申すのは、まことに恐入りますが、我が藩の一大事に就き、身分をかへりみず言上致す次第であります。」

「即時出兵を余に望むと申すのだな。」

「左樣でございます。」

臆する氣色もない返答であつた。久光は傍らの煙草盆を引寄せて煙管を取上げたが、火はつけようとせず、指先で弄びながら、

「余の知るかぎりでは、この度のことは變事にちがひないが、兵亂と申すほどのことではない。坂口吉兵衞の口達によれば、水戸藩士の人數も僅か十六人にすぎず、しかも斬姦狀と稱する書面には水戸浪士と記してあつたと言ふ。藩士ではなく浪士だ。」

「おそれながら、そ……それは……」

大久保が何か言はうとすると、久光は火のついてゐない煙管で吐月峰を激しく鳴らして、

「勿論、それは證據をくらますために、脫藩の形式をとり、わざと浪士と書いたのかもしれぬ。しかし、同勢僅か十七名で、しかも浪士と自稱したとあれば、水戸が全藩を擧げて行動したのではないことは明かである。事變にはちがひないが兵亂ではないと余が申すのはこのことだ。江戸留學生の一部の者の密謀にすぎぬと言はれても辯解の餘地

はなからう。」

「恐れながら申上げます。一擧の重立ちたる者は決して諸生や留學生ではございませぬ。高橋多一郎、金子孫二郎は藩の長老として重職にあり、その他の諸士も身分年齡共に私共よりはるかに上の者であります。」

「然らば尋ねるが、事變後二十日以上すぎた今日、水戸本藩はどう動いてゐるか。越前、長州土州その他の諸大藩はどう動いてゐるか。お前のところに詳細な報告でも來てゐるかどうか。」

「まだ、それは參つてをりませぬ。」

「その見極めもつかぬうちに、我が藩のみが輕率に出兵したら、あとでどんな難題が起るかもしれぬ。いやしくも一藩の運命を賭して三千の大兵を動かすのだ。三十や五十の浪士の暴發では口實にならぬ。天下の動亂を待つて初めて出兵の理由も成立つ。余の申してゐるのはそのことだ。そのくらゐなことの解らぬお前でもなからう。」

久光は煙草に火をつけた。そこまで言へばもう申すことはなからうといひたげな顏色であつた。

*

だが、大久保市藏は叩きつけられた鞠よりも早くはねかへつて來た。この前面謁を許した時にも久光は感じたが、この若侍には、鍛へのいゝ刀身のやうな粘り氣がある。無銘の新刀ではあるが、叩いてもなかなか折れず、しかも小氣味のいゝ切れ味を藏してゐるやうだ。

「お言葉は御尤もでありますが、諸藩の動きは目下のところ察しがたいと申すものの、とてもこのまゝですむはずはございません。何と申しても天下の大老を征伐したのでありますから、まさに未曾有の大事件、必ず天下の大動亂となるに相違ございませぬ。」

「天下の大動亂と申すか。」

「幕府は必ず水戸藩に對してのみならず、恐多くも朝廷に對し奉つて、無謀なる大强壓手段に出るでありませう。水戸のことは水戸に委せると致しましても、朝廷の御危難は一刻も看過し奉ることはできませぬ。諸藩は直に動きはじめます。藩主が動かなくても、藩士が動きます。既に動きはじめてゐます。高時、高氏のあるところ、十人の正成、百人の義貞が必ず出現致します。天朝の御危難に際しては一切を捨てて立上るのが、古來我が國人臣の至情であります。諸藩に後れをとつては我が薩摩の恥辱であり、且つは先君の御遺志にも反します。即時御進發のほどを、私は……

……」

「そのくらゐのことは余も心得てゐる。お前の口から聞くまでもない。余の申してゐるのは眼前の事態だ。幕府はまだ動き出した模樣はない。天朝に對し奉つて、いかなる行

動に出るかは今後の問題だ。お前も我藩の家臣なら、我が藩の前途をよくよく考へてもらはねばならぬ。余は決して出兵の用意を怠つてゐたわけではない。だが、兵を動かすには名分が要る。出兵した後の見込みも十分に立てておかねばならぬ。それに就いて、お前は成案を持つてゐるか。あるなら申してみよ。」

「出兵の名目だけなら、既に十分と存じます。」大久保は即座に答へた。「恐れながら、君公忠義樣には、たゞ今御參府の途中にあり、博多あたりに御滯在かと拜察いたします。また江戸城には御當家の姫君なる天彰院樣が在らせられます。君公御參府の途上を警護し、江戸に於ては天彰院樣をお護り申すための增兵と申せば、今から五百や千の兵を急派いたしましても、立派に名目は立ちまする。」

「何を申すか。そのやうな見えすいた口實では、世間の耳目はふさげぬぞ。」

*

さつぱり氣乘りのしない久光の態度であつた。大久保市藏はしびれを切らしたといひたげに聲をはりあげた。

「勿論でございます。我々といたしましても、正々堂々と大義を唱へ、禁闕御守護の大旆を公然とかざして進發したいのが本意であります。だが、もし後難をはゞからねばならぬとあれば、右のやうな名目を用ひたらよろしからうと申上げたのであります。即ち、幕府に對しては、櫻田の變事に就き天彰院樣御守護のためと言ひ、京都所司代に對しては、君公參府に就き、京阪地方の治安確保のためと屆出で、內實は幕府の暴擧を制し、天朝御守護の實を擧げたなら、たとへ兵亂に及ぶことなく事が落着いたしましても、幕府は我が藩に難題を持ちかけることはできませぬ。」

「現在の幕府がそれほど明き盲揃ひだと、お前は思つてゐるのか。それこそ世間知らずの書生論だ。」

久光の語調は激しく、自信ありげであつたが、言ふことの內容は消極論である。

「そんな見えすいた口實では、幕府の嫌疑は避けられぬぞ。」

「お言葉の通りであります。何と名目をつけても、幕府の嫌疑は避けられませぬ。しかし、この非常の時に多少の嫌疑をはゞかつてゐては、何事もできませぬ。今こそ御大策實行の絕好の機會であります。御決斷肝要と存じます。」

押しつけがましい、と久光は思つた。その不興な顏色を素早く見て取ると、大久保は聲の調子を落して、

「少年客氣の言とお笑ひかもしれませぬが、私の見るところでは、井伊大老を失つた後の幕府は必ず弱腰となり、我が藩の安危に拘るほどの難問を持掛ける實力と勇氣はなからうと存じます。絕好の機會とはこのことであります。ま

た、藩内の情勢を見ますれば、我が黨血盟の同志は既に二百名に及び、先般の御直諭書に從ひ、死を決して突出の用意を整へてをりますので、今に到つて出兵延期ではとても收まりはつきませぬ。私一個の力では抑へがつかぬのであります。」

「抑へがつかぬとは、暴發するといふ意味か。」

「そ、それは……」

「市藏……」久光は膝を正し、聲をはげまして、「暴發するのはお前等の勝手であるが、余は……この久光は決して許さぬぞ。」

「はつ。」

「お前の言ふことは單純すぎる。足が宙に浮いてゐる。もつと足許を見よ。我が藩の大難題は既にお前の足許に發生してゐる。有村兄弟のことだ。彼等兩人の行動をお前は何と申し開きするか。」

久久保はぶるつと身震ひした。久光は不興の色を滿面に漂はせて、

「彼等兄弟は余の直諭書を無視し、他藩の浪士と通謀して暴擧を敢てした。まことに不忠不孝の所爲である。聞けば彼等兄弟はお前等の同志だといふ。然らば、此度の一擧にはお前も同意か、それとも全く關係ないと申すか。」

＊

久光は大久保の急所を衝いたつもりである。たしかに急所にちがひなかつた。大老斬除を「義擧」と言つて來たのなら話の仕樣もある。だが、「暴擧」と言ひ、「不忠不孝の所爲」と言はれたのでは、どうにもならぬ。大久保は必死に自分を抑へてゐる樣子であつたが、やがて諦めたやうに視線を伏せ、

「この一條に就きましては、何とも申上げやうがございません。たゞ恐れ入るばかりでございます。」

「然らば、同意と申すのだな。」

「全然同意だとも申上げかねます。だが、同志の深い盟約より發した止むを得ざる事情がございます。御承知の如く我等同志の者は、かねてより水戸藩の有志と結び、勤皇義擧のことを盟約し、昨秋九月、まさに脫藩突出せんと致したるとき、有難き御直諭書をいたゞき、一同感泣し、血判の請書を奉つて、突出を思ひとゞまつたのであります。それ以來、堅く申合せて少數者の輕擧を戒め、擧藩勤皇の時機を待つべく自重してゐたのでありますが、江戸にゐる同志とは山河隔絕して、御主意の趣きを親しく通達しがたい事情があつて……」

「江戸とは山河隔絕といふほどのことはあるまい。常に連絡があつたはずだ。」

「いえ、我々同志の者にとつては、藩廳の方針に妨げられ

て、完全な連絡は不可能でありました。現に本年二月、私は水戸の情勢切迫の報を受け、江戸の同志を鎭撫するために出府致したいと願ひ出たのでありますが、藩廳は私の心事を疑つて、つひに許さなかつたのであります。」

「ふうむ、左樣なこともあつたか。」

「左樣な事情で、有村兄弟といたしましても、國許の情勢を全く知らぬわけではなかつたものの、眼前に水戸の同志の蹶起を見ては、長き血盟の信義もあり、また我が藩公の御注意も天朝の御爲め斬奸にありと一途に思ひこみ、止むに止まれず、藩の難題を考へる暇もなく、一擧に參加したものと察せられます。……とは申せ、もとより有村兄弟は我々の同志であります。兩人が不忠不孝なら我々も同罪。御心のまゝに御處分下されても、少しも悔ゆる者ではございませぬ。」

敢然と言ひ切つて、大久保市藏はその場に平伏した。斬るなら斬れと言ひたげな不逞な態度にも見えたが、たゞそれだけではない一途な覺悟が感ぜられて、久光は言葉を和らげぬわけにはゆかなかつた。

『しひて同罪と申したわけではない。だが、よくよく考へて見よ。お前等は浪士とはちがふ。いやしくも主君をいただく以上は、どこまでも藩のためを思つて行動すべきだ。斬姦の初志を貫いたことは、當人たちにとつては愉快かもしれぬが、そのために藩の大難を招く結果になつては、その罪を許すことはできない。現に有村雄助の後を追うて、幕吏は藩境に迫つてゐるといふ。我が藩にとつて、これ以上の難題はないぞ。」

*

大久保市藏は平伏したまゝ、頭をあげようとしなかつた。芯から恐れ入つた姿にも見え、無言の抗辯にも見える。

「頭を上げよ。」久光は言つた。「有村雄助には切腹を申しつけたが、お前等一同を見捨てようとは思はぬ。百人を生かすために、雄助一人を殺したのだ。誠忠組一統は、いづれ大策決行の際に役に立つ有能な家來だと余は信じてゐる。一統の志を中途で挫折させずに十分に延してやらうと余は苦心してゐるのだ。」

「有難き仕合せに存じます。お言葉は必ず一同に傳へます。御直諭書の通り、時機到らば必ず出兵といふお言葉は肝に銘じました。」

釘を刺すやうな返事。久光はちよつと狼狽の色を見せて、

「そ、それは……出兵の約束は確かにした。今に及んで食言するやうに聞えるかもしれぬが、有村兄弟のことさへなかつたら、明日にも進發できたかもしれないのだ。兩人の思慮なき行動によつて、出兵は當分延期せざるを得ない、

と一同に傳へるがよい。……尤も、水戸の老公自ら兵を率ゐて馬を陣頭にすゝめるとか、または天朝の御内召が我が藩に下るといふことにでもなれば、問題は別だが、今のところまだそんな樣子は見えぬ。要するに我が藩の進退を決するものは、今後の天下の形勢如何である。幕府と諸大藩の出方次第だ。」

「お言葉の通りに申し傳へます。」

「あゝ、いや、このやうに申せば、天朝のことを二の次にして、幕威を恐れてゐるかのやうに思ふものがあるかもしれぬが、久光不肖なりと雖も、天朝を慕ひ奉る心に於ては決して人後に落ちぬつもりだ。洩れ承るところによれば、主上も幕府の窮狀を憐み給ひ、何とかして幕府を助けたき思召しであらせられるといふ。討幕といふやうな輕率な議論は決して御叡慮にそひ奉るものではない。公武一和して皇國の危機を救ふことが現存の急務だ。そのためには、幕府の施政の惡い部分を矯正し、朝權の回復をはからなければならぬ。これが余の念願であり余の信念である。」

大久保はさつと頭を振り起し、何か反駁したげな氣配を示したが、久光は押しかぶせて、

「お前等一同は今のところ興奮してゐるから、なかなか承知すまいと思ふが、余が余の考へだけを述べておく。言葉は十分でなかつたかもしれぬが、余の意のあるところを篤と一同に申し傳へよ。それでも不承知を唱へる者があるなら致し方ない。余には余の考へがあるぞ。」

言ひ捨てて、久光は中山尙之介の方に眼くばせした。もうよからう、退出させよといふ意味であつた。

「しばらく……しばらくお待ちを。」大久保は兩手をついて、「今一つだけ、お願ひがございます。」

「まだ申すことがあるのか。」

「西鄕吉之助召還のことにつきまして……」

西鄕といふ名前を聞くと、久光の不興の色は見る見る濃くなつた。中山尙之介も吱拂ひして、それは言はぬ方がいいだらうと合圖した。だが、大久保は必死の面持で、

「西鄕吉之助は御大策決行のためにも、現下の藩論統一のためにも、必要缺くべからざる人物であります。その理由は、既に書面にて度々申し上げ、殿も十分に御承知のはず。事變突發次第、直に召還するといふ御口約も確かにいたゞいたと存じてをります。」

「たしかにそれも約束した。忘れたわけではない。」進まぬ顏色で久光は答へた。「しかし、出兵が延期になつたのだから、西鄕召還も急ぐには及ぶまい。」

「恐れながら申し上げます。形勢は切迫してをります。第二第三の事變の突發はこゝ旬日のうちと考へられます。西鄕召還も今直に行はなければ間に合はぬおそれがありま